

地域包括ケア 将来探る

福井で全国国保医療学会が開幕

事例や課題発表に千人



国保診療施設の医師や看護師、保健師らが集う第63回全国国保地域医療学会が6日、福井市のアオッサとハピリンで始まった。自治体職員や大学生らを含め45道府県から約1060人が参加。2日間の日程で、病気の予防や治療、介護、福祉、みどりといった幅広い分野で事例や課題を発表し、地域包括ケアの将来像を探った。

(嶋本祥之)

大会は全国国民健康保険診療施設協議会などが主催。住み慣れた地域で医療や介護、生活支援を一体的に提供する「地域包括ケア」の推進に向け、「コロナ超え、今こそ羽ばたく地域包括ケア」をテーマにした。学会長の中村伸一・おおい町名田庄診療所長は「議論と交流を通じ、幸せの輪が全国に広がることを願う」とあいさつ。同協議会の小野剛会長(秋田県横手市の市立大森病院長)は「より質の高い地域包括ケアシ

地域包括ケアを実践する医師や看護師ら約千人が集った全国国保地域医療学会 6日、福井市のアオッサ

ステムの構築に寄与することを目指す」と述べた。

国保診療施設を開設している自治体の首長らが登壇したサミットで、中塚寛・おおい町長は「地方の医療や介護などは厳しさを増し、都市との格差は『命の格差』とも言える状況」と指摘し、格差是正を強く求めた。岩倉光弘・南越前町長は昨年8月の記録的大雨の被災者らを対象に、今庄診療所で精神科医によるス

トレス相談会を開いたことなどを紹介した。福井県医師会の池端幸彦会長の特別講演もあった。

2日間で計227件の研究発表がある。最終日の7日のシンポジウムには、越前町織田病院の根本朋幸院長や高浜町和田診療所の井階友貴医師らが登壇。専門分科会では、食支援や在宅ケア、歯科保健などをテーマに医師や作業療法士、管理栄養士らが発表する。